

筑紫野市指定無形民俗文化財

やま え いわ と か ぐら
山家岩戸神楽

— 江戸時代からの里神楽



すきのおのみこと
神楽面 素蓋鳴尊



▲黒田藩も神殿、神楽殿などの再建にかかわった山家宝満宮

江戸時代の長崎街道「筑前六宿」の山家（市内大字山家）は『筑前国統風土記』に「東西の通路にて、宿駅なり。町あり、国君の行館あり。民家多し。又博多より二日市を經、甘木に行き、筑後豊後へ通る。南北の大道も、此宿の少西にあり。」と繁栄ぶりを伝えています。

この町はずれにある山家宝満宮で毎年10月17日に催されるのが山家岩戸神楽です。江戸時代から筑前に伝わっている「里神楽」で、天鈿女命あめのうづめのみことが天の岩戸の前で舞いを奉納する場面があることで「岩戸神楽」と呼ばれています。昭和34年の記録だと「神供」から最後の「天岩戸」までの命割みことわり（演目）は16番でしたが、9番を奉納しています。

もともと神楽奉納は氏神に秋の豊作を感謝する神事で、10月1日に参道の鳥居に氏子がねりあげた大注連縄おおしめなわをたてることで秋祭りが始まります。同12日に潮井取りなどの儀式をへて17日午前「宮座」が催され、午後から神楽の奉納となります。

明治期までの岩戸神楽は神職によって舞われる「社家神楽」でしたが、神職制度の変革にともない氏子たちが参加した神楽社が組織されて伝統の保存につとめています。平成4年現在の社員は、鶴崎弘司宮司など18人で、現在は命割18番のうち13番を奉納しています。昭和51年に筑紫野市無形民俗文化財の指定を受けています。



▲毎年10月17日の神楽奉納には、境内の参拝者が多い

山家宝満宮

山家宝満宮は、祭神が玉依姫、神功皇后、
 応神天皇で、宝満山竈門神社をこの地に勧
 請したものです。施主は、筑前の豪族筑紫
 満門の配下として山家庄を領有していました
 砥綿氏で、その時期は、同宮の棟札によると
 永正18(1521)年4月でした。

(慶安、元禄、天明年間に黒田藩主たちが内
 殿、拝殿、神楽殿などを建立しています。現
 在の拝殿は弘化2(1845)年に再建されたも
 のです。

『筑前国統風土記附録』には、弘治年中
 (1555~58)、兵火によって社殿が焼失した
 が、藩主黒田忠之によって再興された記録が
 あります。

宝満宮宮座「縁起」によると、天文年間
 は神官20余人で大祭が催され神輿、笠懸(馬
 上から笠の的に弓矢を射る行事)とともに音
 楽が奏せられたことが見えますが神楽につ
 いての記録はありません。弘治3(1557)年
 ころから神楽の古い形があり、元禄6(1693)
 年は神楽が奉納されていたことがわかります。

演目18番は、神供、祝詞、手草、敷時、天

=神楽面=



天細女命



翁



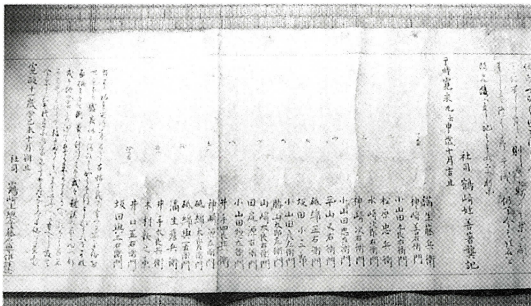
事代主神



荒振神

神、両刀、櫛舞、御弓、高処、四神、荒神、
 荒振神、事代、笹舞、問答鬼、神相撲、磯羅、
 天岩戸。このうち注目されるのが「荒振神」
 で、「筑後国風土記逸文」にある籠猛神を
 モデルにしたものです。“筑紫”の国号起源
 説話をとりいれているようです。

出雲系の神楽で、翁や女、鬼の面を付けて
 舞う「面神楽」と、鈴や櫛など持って舞う「採
 物神楽」の二種に分けられます。



▲山家岩戸神楽についての寛永年間の文書